

# マルコによる福音書 14 章 43 節～52 節

2018 年 10 月 25 日

古本 靖久

1、聖歌 355 番 「ベツレヘムの村 行き交う人々」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 93 ページ）

4、テキストの位置

前回の場面、ゲツセマネでの祈りの最後にイエス様は、「立て、行こう。見よ、わたしを裏切るものが来た」と弟子たちに言いました。

「敵が来た！まずいぞ、逃げろ」ではなく、十字架という運命を受け入れるイエス様の姿がそこにはあります。

エルサレムにて	水曜日	14:1-2	イエス殺害計画
		14:3-9	埋葬準備
		14:10-11	ユダの思い
	木曜日	14:12-16	過越の準備
		14:17-21	主の晩餐
		14:22-26	最初の聖餐式
		14:27-31	ペトロの裏切り予告
		14:32-42	ゲツセマネでの祈り
		14:43-52	イエスの逮捕
		14:53-65	イエスの裁判
14:66-72	ペトロの否認		

イエス様の逮捕のときに、周りの人たちはどのような行動を起こしたのでしょうか。

5、節ごとに

◆ イエスの逮捕

**14:43** さて（そしてすぐに）、イエス（彼）がまだ話しておられると（いるうちに）、十二人の一人であるユダが進み寄って来た（現れる）。（そして）祭司長、律法学者、長老たちの遣わした群衆も、剣や棒を持って（彼と）一緒に来た。

ゲツセマネでの祈りのあと、弟子たちと会話をしている途中で現れたのは、12 弟子の一人であるユダでした。「12 人の一人である」とわざわざ書かれていることから、最も近くにいた弟子ですら、イエス様を理解することができなかったことを強調しているようにもみえます。

イエス様を捕らえに来たのは、群衆でした。ガリラヤでイエス様が伝道をしていたとき、その周りにはたくさんの群衆がいました。そして群衆は、イエス様の味方だったはずですが、しかしここに出てくる群衆は、敵対者になっていました。彼らはユダヤ教の指導者たちに扇動されたのでしょう。

**14:44** イエス（彼）を裏切ろうとしていたユダ（引き渡す者）は、「わたしが接吻するのが、その人だ。（その者を）捕まえて、逃がさないように（間違いなく）連れて行け」と、前もって（彼らに）合図を決めていた（教えて言った）。

イエス様は日曜日にエルサレムに入り、少なくとも火曜日までは神殿で教えていました。隠れてこそこそと教えていたわけではありません。ユダヤの宗教指導者たちは、イエス様の姿を目に焼き付いていたことでしょう。

ここで疑問が浮かびます。イエス様の逮捕に向かった人々は、イエス様のことを知らなかったのでしょうか。ゲツセマネの園は木が生い茂り、暗くて分からなかったのだろうか、巡礼者がたくさんいて混雑しているために、イエス様を見つけづらかったからだとか、いろいろと説明がされます。それであれば、ユダも条件は同じだと思いますが。

またユダは、イエス様を遠くから指さして、「あいつがイエスだ」と合図することもできたはずですが、しかしユダは、イエス様の近くに行くことを選択します。この場面から、ユダはイエス様に対して憎しみだけを抱いていたわけではなかったと考えるのは、読み込みすぎでしょうか。

**14:45** （そして）ユダ（彼）はやって来ると（来て、）すぐに、イエス（彼）に近寄り、「先生」と言って（う。そして彼に）接吻した。

45 節にも 44 節同様、「接吻する」という単語が出てきます。日本語の訳は一緒ですが、原文のギリシア語をみると違う単語が用いられています。44 節は「フィレオー」、45 節は「カタフィレオー」、「カタフィレオー」の方が強い動作を示し、情熱的な接吻を意味します。

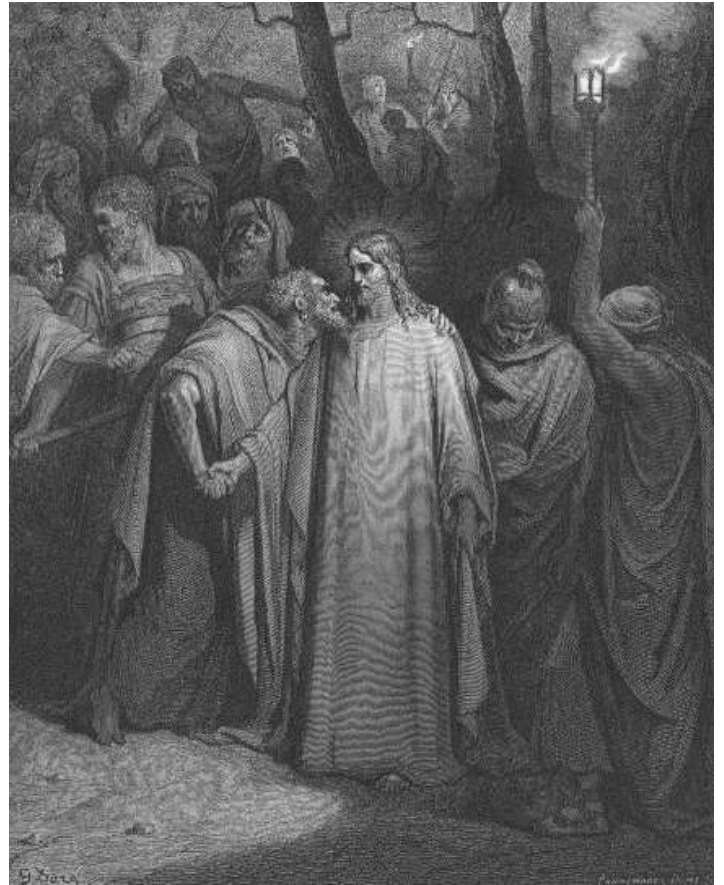
接吻は先生と弟子とのあいさつでしばしばおこなわれていました。口だけでなく、手や頭に接吻することもあったそうです。ユダはイエス様を「ラビ（先生）」と呼びます。ラビとは「わたしの偉大なお方」という意味です。

マルコ福音書では、これ以降ユダは登場しません。ユダとイエス様は、最後に敬愛と友情を示す接吻をして離れて行くのです。

14:46 (そして)人々(彼ら)は、イエス(彼)に手をかけて捕らえた。

マルコ福音書によるとイエス様は、ユダとの接吻のあと何の抵抗もせずに捕らえられます。そのイエス様の姿は、イザヤ書 53 章の「屠り場に引かれる小羊」を思い起こさせます。

逮捕の前にマタイ福音書ではイエス様はユダに「友よ、しようとしていることをするがよい」と言われ、ルカ福音書では接吻する前に「ユダ、あなたは接吻で人の子を裏切るのか」と言われたとあります。マルコ福音書の描写は、淡々と神さまのみ心を受け入れるイエス様の姿が強調されているように思います。



14:47 (そこで)居合わせた(そばに立っていた)人々のうちのある者が、剣を抜いて大祭司の手下(僕)に打ってかかり、片方の(その)耳を切り落とした。

この「耳を切り落とす」出来事は、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネのすべての福音書に登場します。しかしその描き方は、若干違うようです。

	マタイ	マルコ	ルカ	ヨハネ
切り落とした人	記載なし	記載なし	記載なし	ペトロ
切り落とされた人	記載なし	記載なし	記載なし	マルコス
剣を用意したのは	記載なし	記載なし	弟子たち	記載なし
イエス様の言動	剣をさやに納めなさい	記載なし	やめなさいと言って癒す	記載なし

これをみると、マルコ福音書ではここでも起こった出来事のみを淡々と簡潔に報告していることがわかります。逮捕の場面の詳しい状況は、他の福音書同様、マルコ福音書を書いた人にも伝わっていたと思われます。

しかしその場面をあまりにドラマティックにしまうと、「黙って十字架に向かう」イエス様から目が離れてしまうのかもしれませんが、マルコが伝えたかったのは、わたしたちのためにすべてを引き受けて、その道をただ真っすぐに進んで行くイエス様なのです。

14:48 そこで、イエスは彼らに（答えて）言われた。「(あなたたちは) まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って（わたしを）捕らえに来たのか。

イエス様は強盗でしょうか。そうではありません。しかしユダヤ教の宗教指導者たちは、イエス様たちを危険人物とみなしていたようです。政治的に危険だったのか、それとも宗教的か。ともかく彼らはある程度の反撃は覚悟していたようです。

確かに少なくとも一人、耳を切られていますので、その恐れはまったく根拠のないものではありませんでした。

14:49 わたしは毎日、神殿の境内で（あなたたちと）一緒にいて教えていたのに、あなたたちはわたしを捕らえなかった。しかし、これは聖書の言葉が実現（成就）するためである。」

しかし先ほども触れたように、日曜日から火曜日までイエス様は神殿で教えていました。そこには祭司長も律法学者も長老たちも、そして群衆もいたはずです。しかし彼らは、イエス様の教えに熱心に耳を傾ける人たちを恐れました。そのためひそかに行動したのです。

イエス様はそのことを、(旧約)聖書の成就であると言います。ただし特定の箇所を指しているわけではありません。旧約聖書全体によって預言されていたことが、このときに実現するのです。

イエス様が逮捕されること、ユダによって裏切られること、そして弟子たちが逃げて行くことも、すべては神さまが決められたことだったのです。旧約聖書に記された神さまの意思が、ここに成就したのです。

すべてが神さまのご計画であることをマルコ福音書は強調します。そのため裏切りの張本人であるユダはそれほど非難されません。(マタイ福音書と使徒言行録には自殺の場面が描かれている)。また逮捕した人たちも非難されていないのは、神さまによって役割を演じさせられたということだからなのかもしれません。

14:50 (そして) 弟子たちは皆(が)、イエス(彼)を見捨てて逃げてしまった。

そして皆、その場から逃げてしまいます。すべての人が、イエス様を見捨ててしまうのです。裏切ったのはユダだけではありません。自分の身を案じ、イエス様を置き去りにした人たちも、裏切ったのです。

14:51 (そして) 一人の若者が、素肌に亜麻布をまとって (一緒に) イエス (彼) について来ていた。(そして) 人々が捕らえようとする、(。)

突然ここで、一人の若者が出てきます。この若者の話は、マルコによる福音書にしか出てきません。そのため、この若者は誰なのかという議論が昔からおこなわれてきました。

一番よく言われていたのが、この若者はマルコ自身ではないかという意見です。使徒言行録 12 章 12 節にこのような記述があります。

こう分るとペトロは、マルコと呼ばれていたヨハネの母マリアの家に行った。そこには、大勢の人が集まって祈っていた。

エルサレムの近くには、マルコの家があったようです。イエス様の死後、祈りの場として使われていたこの家を、もしも最後の晩餐のときにも使っていたとしたら。そしてその最後の晩餐の場面にマルコもいたとしたら。さらにマルコがイエス様にゲツセマネまでついて来ていて、この場面を迎えたのだとしたら、と想像したわけです。

またあくまでも想像ですが、「サイコ」や「鳥」で有名なアルフレッド・ヒッチコック監督が自分の作品のどこかにほんの一瞬だけ必ず姿を出すように、福音書記者マルコも自分の姿を少しだけ入れたのではないかと考える人もいます。

他にも使徒ヨハネではないかという説や、イエス様の兄弟ヤコブではという説、アモス書 2 章 16 節に「勇者の中の雄々しい者も その日には裸で逃げる、と主は言われる」とあるから、このような出来事をあえて組み込んだのだという説、などなど。

さらにこの若者が裸に亜麻布をまとっていることから、この若者は死者の中からイエス様によって甦らされたばかりで、神の国の秘儀を聞いている最中にイエス様が捕まってしまったという説明など、よく思いつくなあ后感心するものもあります。

14:52 (すると彼は) 亜麻布を捨てて裸で逃げてしまった (行った)。

若者は裸で逃げて行きます。下着はつけていたかもしれません。群衆はイエス様の周りにいた人たちにも襲い掛かり、捕らえようとしていたようです。

こうしてみると、弟子たちが逃げてしまったのも無理はなかったのかもしれませんが。この出来事から浮かび上がるのは、逃亡する若者の姿と、逃げようともせず自らの運命を静かに受け入れるイエス様の姿です。その対比を強調するために、この物語は挿入されたのかもしれません。

## <今日の箇所から>

ユダはどのような表情で、イエス様に近づき、接吻したのでしょうか。「裏切り者ユダ」というフィルターを通してみると、怖い顔をしたユダの姿が目には浮かんでしまいます。

しかしユダは、本当はイエス様のことが大好きだったのだとしたら。

本文の中でも触れたように、ユダがイエス様の近くに行行って接吻しなくても、群衆はイエス様を見つけ逮捕したことでしょう。「きっとあの辺にいる」と指をさすだけで、十分だったはずで



しかしユダはそうせずに、イエス様の元に行きました。最後の挨拶を交わすかのように接吻をするユダの目には、きっと涙が浮かんでいたに違いない。わたしはそう思います。

さて今日の場面には、たくさんの人たちが登場します。ユダ、イエス様を逮捕しに来た群衆、耳を切りつけた人、そのほかの弟子、裸で逃げた若者。わたしたちがもし2000年前のエルサレムにいたとしたら、どのような行動をしていたことでしょうか。

聖書は、すべての人がイエス様の元から離れて行ったことを報告します。さらにそれは、すべて神さまのご計画であるといえます。

イエス様の逮捕、裁判、十字架刑、イエス様の死と、目をそむけたくなるような出来事が続いていきます。それらも含めて、神さまのご計画です。そして物語は、イエス様の復活へと続いていくのです。

神さまはわたしたちが「生きる者」となるために、イエス様を遣わされました。一つ一つの出来事はとても辛く悲しいことです。わたしたちの日常の中にも、苦しみや暗闇が多くあります。でもその先には、希望があります。明けない夜はないのです。

今回の学びはこれで終わります。次回は11月29日(木)10時半からです。「イエスの裁判」(マルコ14:53~65)について学んでいきます。